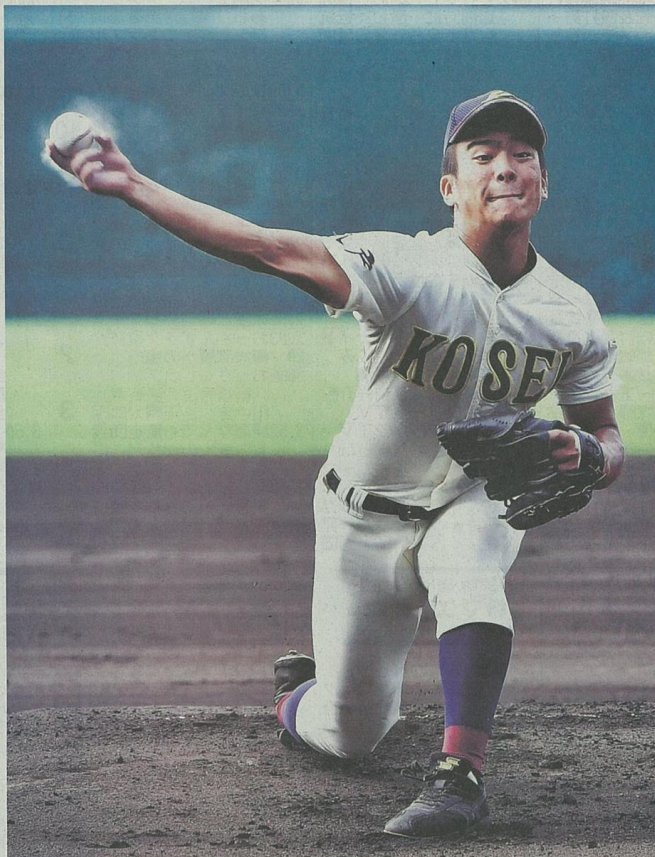


反骨心で夏燃焼

「県内、県外関係ない」 厳しい環境で成長

光星・下山（弘前出身）



夏の甲子園の準々決勝で初先発した八学光星の下山昂大。今大会は勝負強い打撃でチームをけん引し、8強入りの原動力となった＝18日、甲子園

全国高校野球選手権大会で5年ぶりの8強入りを果たし、存在感を示した八学光星ライン。抜群の勝負強い打撃でチームの躍進に大きく貢献したのが、弘前市出身の下山昂大だ。中学時代は地元の有名校や青森県外の名門からも声が掛かったが、二つの強い自負を胸に入学した。小学校で野球を強いる光星での2年半は甘いなと、母に話した。入学後、連絡を取り合っていたという弘前市在住の祖母勝子さん(71)は「入学当初は『なんでここ(光星)に来たのか』という目から念願のベンチ入り。だが、2年夏、3年春と出場した甲子園では上位進出はかなわなかった。今春の県大会ではライバルの青森山田に初戦敗退。勝さんとの電話で、自らの失策が絡んだことに触れ『自分のせいで負けてしまった』と、涙声で落ち込んでいたという。『めったに弱音は吐かないのに、責任感の強い子だから、考えるところがあったんだろう』と勝さん。

勝負強い打撃、先発登板も

18日の準々決勝は、甲子園で初の先発マウンドに立ったが、結果は6失点で途中降板とほろ苦い思い出。敗戦を悔やみつ、下山は「限られた人しか立てない場所。ここに来られたのは、たくさんの支えがあったからこそ」と周囲に感謝した。

その上で「県内だとか県外だとか出身地など関係ない。強い光星に来たからこそ自分分は成長できた。これを糧に次に進みたい」と、前を向いた。

その集大成の舞台で躍動。開幕試合の1回戦で初回に満塁本塁打を放ち、令和初のホームランボールは甲子園記念館に展示中。3回戦ではサヨナラ打を放つなど、勝負強い打撃でチームをけん引した。仲井基監督も「6番は大切なポイントゲッター。よくやってくれた」と評した。